

Journées Francophones de Radiologie (JFR 2025) 参加報告
(2025 年 10 月 3 日～6 日 於: フランス・パリ Palais des Congrès)

四国がんセンター 循環器内科 倉田 聖

2025 年 10 月 3 日から 6 日、フランス・パリのパレ・デ・コングレ(図 1)にて開催された Journées Francophones de Radiologie (JFR 2025) に参加しました。JFR はフランス語圏を中心とする欧州最大級の放射線学会で、今年は「Radiology – the Images of a Life (放射線学 – 人生のイメージ)」をテーマに、約 1 万 3 千名の参加者が世界各国から集まつたそうです。放射線診断が人生のあらゆる段階で果たす役割を再考し、特に小児・高齢者などの “radiologically vulnerable” 患者を中心とした教育・実践セッションが多く企画された点が印象的でした。

IVR 領域では血管内・経皮的手技のハンズオントレーニング、超音波領域では腹部・婦人科の実技教育が行われました。筆者はフランス語が専門外のため詳細を十分に理解できませんでしたが、「Controversies」「No Safety Net」といった討論型セッションでは放射線科医がライブ症例を即興で診断・議論しており、会場は熱気に包まれていました。また展示会場内の「AGORA SFR JUNIOR」(図 2)では、若手放射線科医や研修医を対象に、キャリアパスの多様性、次世代教育、メンタリング、AI 時代の放射線科の未来像などをテーマにした双方向型セッションが開かれていました。

注目されたのは、生成 AI の臨床応用と業務効率化、バーンアウト対策を扱ったセッションでした。報告(*JAMA Network Open*, 2024)によると、AI 導入施設の放射線科医ではバーンアウト率が依然高く、信頼性検証や修正作業が新たな負担となっていました。一方で、生成 AI による自動レポート作成と構造化を導入すると、従来 35～50 分要していたワークフローが 22～31 分に短縮し、生産性が 25～40% 向上したと報告されていました。AI は「業務を代替する技術」ではなく、「医師の時間を知的判断と患者対応に再配分する支援ツール」として位置づけられており、教育・倫理・経済体制の整備が今後の課題とされていました。

循環器領域では、筆者が登壇した教育セッション “Your JFR – What’s new about cardiomyopathy in 2025” が開催されました。フランス、カナダ、メキシコ、日本からの登壇者が、肥大型(HCM)・不整脈原性(ACM)・非拡張型左室心筋症(NDLVC)・拡張型(DCM)の 4 疾患を包括的に論じられました。筆者は NDLVC の臨床的・形態的特徴と遺伝的背景について講演し、心臓 MRI や遺伝子解析を用いたリスク層別化の重要性を示しました。座長からも「MRI と遺伝子診断を日常診療にいかに組み込むかが課題」とコメントがあり、臨床実装への期待が示されました。国際セッションは英語プレゼンでしたが、AI による同時フランス語翻訳がスライド下部に自動表示される技術も印象的でした。

JFR 2025 は「技術と人間性の調和」を掲げ、AI や画像解析が進歩しても、患者の信頼を支えるのは医師の知見と情熱であることを再確認させる学会でした。放射線学が「人の一生を映す学

「問」として進化する未来を感じる貴重な経験となりました(図3)。このような国際発表の機会を与えてくださった日本医学放射線学会国際交流委員会の諸先生方に深く感謝申し上げます。

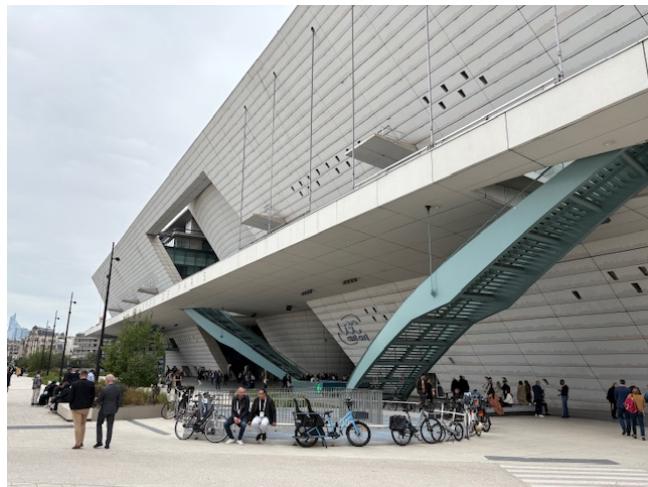


図1



図2



図3